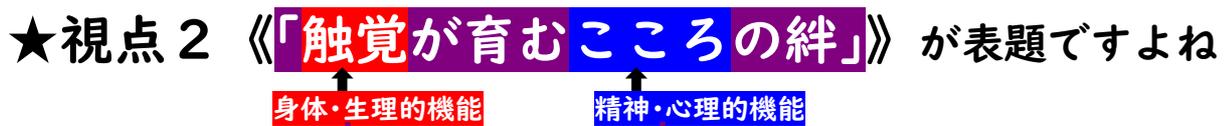
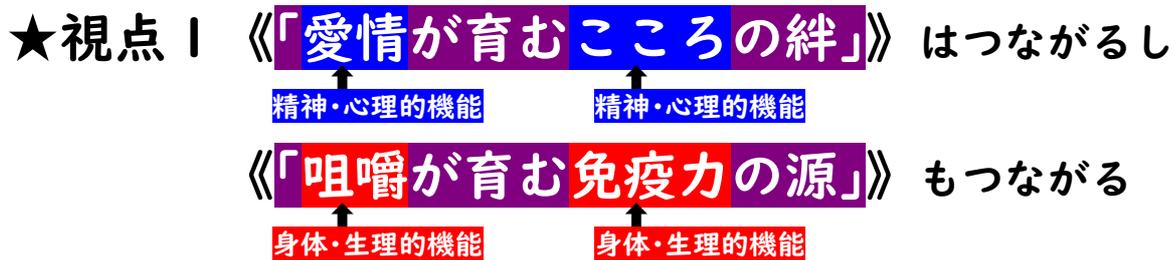


■序章：基本的な視点～まずは、ココをハッキリと

Q1 「触覚が育むこころの絆」という表題自体に
 ”あれっ？”って思うところはないですか？



からだ(身体・生理的機能)と**こころ(精神・心理的機能)**、

A：違和感なくこの表題を読まれた方も多いかと思えます
 ~でも、「『**当たり前**』に思う」ことの中に、「子ども達の発達を
 考えていく上での『**大きな見過ごし**』が潜んでいる」ことも
 多いのです

B：今回は、**からだ(身体・生理的機能)**と**こころ(精神・心理的機能)**との対比を軸に、
 1) この両者(触覚とこころ)のはたらきにはつながりがあるのか？
 2) あるとすれば、どの様なつながりなのか？
 を考えていきたいと思えます

C：ここ分(解・判)ってくると、**基礎感覚のうちの一つ**である
触覚の重要性が、一段とよく見(観・視)えてくるでしょう

第1章：「スキンシップ」のコミュニケーション

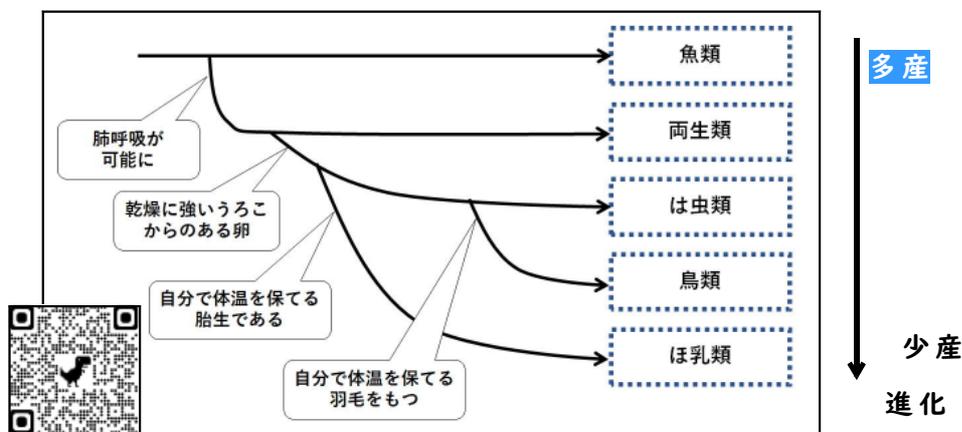
※ 英語ではなく、「和製英語(日本人の造語)」です

A・「触覚」が意味するもの

1. スキンシップを英語に”意識”すると ……Attachment(アタッチメント)
2. でも、アタッチメントをもう一度日本語にすると ……愛着(行動)
3. ということは、「スキンシップ」も「Attachment(アタッチメント)」も「愛着(行動)」も同義語として考えてみよう

B・進化の中での「触覚」の役割

1. 進化するほど、一度に産む子孫の数は少なくなる



【出典／<https://chuugakurika.com/wp-content/uploads/2018/03/%E9%80%B2%E5%8C%9602.png>】

2. 「卵(たまご)」で産む進化の段階から、「赤ちゃん」で産む(哺乳類)の段階へ

- 1) 同じ哺乳類でも、進化の初期段階(例：ネズミ)の方が多産で未成熟なまま出産
- 2) さらに、進化が進むほどに少産(例：馬・牛)……胎内で成熟させてから産む
- 3) そして、霊長類(サル・ヒト)まで進化が進むと……一匹(一人)しか産まないのに未成熟(?)

↓
「授乳」に始まる「養育」の時期が長くなる

- 4) ここに、「スキンシップ」という行動の重要性が高まってきたカギがありそう

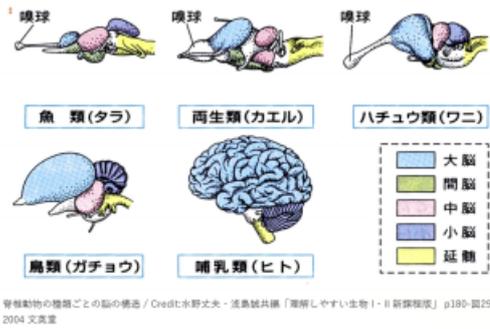
B・脳が進化していくに伴い、「触覚」のはたらきも進化

1. 従来の本能的な行動(原始系)だけではまかない切れない

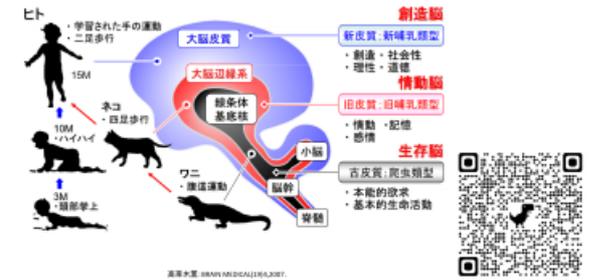
- 1) 取り込み行動：餌とあらば向かっていく
- 2) 逃避防衛行動：天敵とあらば身構える・逃げる
- 3) 闘争行動：餌に襲いかかるときも、敵に襲われて逃げる時にも闘いが必要

2. より適応的な行動を作り出す触覚のネットワーク(識別系)が進化

- 1) 自分の手に持ったもの(モノ)に注意や関心を向ける → 手と目の協応
- 2) 自分の体に触れた相手(ヒト)に注意や関心を向ける → アイコンタクト・表情のやり取り
- 3) 手探り／触ったモノの形・大きさ・素材を触り分ける → 触-運動知覚／触覚弁別



赤ちゃんの発達と、人の進化は似ています。



【出典／<https://nazology.net/wp-content/uploads/2021/06/17eeb41b292864afbd9d61991447bd69-900x526.jpg>】

【出典／<http://www.bini.jp/manasys/wp-content/uploads/2017/12/40722f131ba9f9f98dfe49b0b2a790b1.png>】

- 3. **原始系のネットワーク**は、**大脳辺縁系**止まり(であろう) ……解剖学の説明
 ⇒だから、個体の生存に関わる**本能的な反応**が出る ……生理学の説明
- 4. **識別系のネットワーク**は、**大脳新皮質**まで情報が届く(であろう) ……解剖学の説明
 ⇒だから、その時・その場・その状況に応じた、**適応的な反応**が出る ……生理学の説明

C・その一つの成果が「**スキンシップ**」のコミュニケーション
 ↓
「愛着Attachment(アタッチメント)」の形成

第2章：「**スキンシップ・コミュニケーション**」の研究

※ 出典は、過日に行われました「発達理解実践講座」の配布資料をそのままパクらせていただきました(一部加筆)

【2021年度：発達理解実践研究会用資料・第4回目「パーソナリティーの発達」2021-09-05】

1. R. A. **スピッツ** (Rene Arpad Spitz : 1887~1974)

1) 精神分析学、児童精神医学の分野で活躍

- ①ウィーン生まれ／晩年はコロラド大学医学部精神科で名誉教授
- ②WHOの精神衛生コンサルタント



R. A. スピッツ(1887~1974)

2) 「**愛着理論**」の定式化に大きく貢献

- ①**ホスピタリズム(Hospitalism : 施設病)**の研究(1945年)
 ~入所施設(第二次大戦後の孤児院)の子ども達の調査
- ②身体発育のみならず、言語や知能、果ては免疫力を含む各種の発育・発達
 の遅れや低下が、母性的な環境から阻害された際に生じることを検証
- ③**アナクリティック(依存的)な抑うつ(anacletic depression : 1949年)**
 ~少なくとも6ヶ月以上の母親と良い関係にあった後の**母性剥脱**
 →泣きやすくなり、体重減少、睡眠障害
 →3ヶ月以上経つと、運動が緩慢、うつろな目つき、無表情
 しかし、母親と再会できると、急速に回復

2. ジョン・ボウルビィ (John, Bowlby : 1907～1990年)

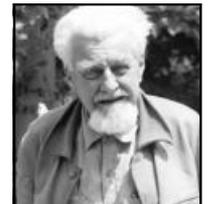


ジョン・ボウルビィ(1907～1990年)

- 1) イギリス～精神科医、精神分析家／専門は精神分析学、児童精神医学
 - ①精神医学に動物行動学(エソロジー)的視点を取り入れ
 - ②愛着理論をはじめとする早期母子関係理論を提唱
- 2) **内的ワーキングモデル**
 - ①子どもの発達初期に、養育者との関係の中で形成される認知的枠組(≒シエマ)
 - ②成人期になってからの他者との関係のあり方にも影響すると考えた
- 3) **愛着行動(attachment)**
 - ①養育者の世話を誘発するような乳児にとっての有効な**社会的適応システム**
 - ②乳児の発信的行動に対して母親が自然に反応するという**生得的システム**
～母親といった特定の対象(大人、養育者)に対する特別な**情緒的な絆(無条件の信頼関係)**
 - ③乳幼児と母親、またはそれに代わる養育者との人間関係が、親密かつ持続的で、しかも両者が満足と幸福感によって満たされるような状態が**精神的健康の基本**(1951年)
 - ④『母子関係の理論(1958)』という研究～子どもと母親の結びつきの本質についての考察
 - ⑤**動物行動学(エソロジー)**的な研究：コンラート・ローレンツやニコラス・ティンバーゲンの研究を取り入れ、ロバート・ハインドによる研究から、人間の子どもでも同様な傾向が見られると確信

3. コンラート・ツァハリアス・ローレンツ (Konrad Zacharias Lorenz : 1903～1989)

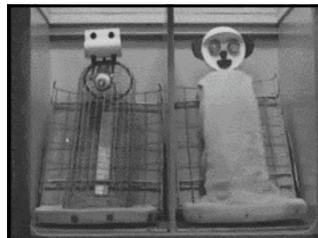
- 1) **インプリンティング(刻印付け、刷り込み)**
 - ①刷り込みの成立する時期＝**臨界期**があることを、マガモの実験で証明
 - ②**臨界期**＝個体が環境から学習する際に、最も敏感に学び取ることができる時期 ≒**敏感期**
～その時期に経験(学習)したことが、生涯にわたって大きく作用



コンラートツァハリアス・ローレンツ(1903～1989)

4. ハリー・ハーロー (Harry Harlow : 1905～1981)

- 1) **ハーローの「針金ザル」の実験**
 - ①愛着の重要性を実験的に検証
 - ②アカゲザルと二つの母親の人形を使った、よく知られた実験

(URL : <http://www.urraca.jp/archives/910>) 【"The Nature of Love" Harry F. Harlow (1958)】

- 2) 情緒の発達の上で、「**スキン・シップ(⇒和製英語の典型)**」の重要性を証明
- 3) **アタッチメント(attachment)理論**
 - ①愛着行動＝乳児がある特定の対象との間に形成する**愛情の絆(affectional tie)**
 - ②アタッチメント行動
 - ・**接近行動** ～特定の対象への接近・接触を求める行動
～本能的反応要素が母親との相互作用を通して統合されて発現
～吸う(sucking)、しがみつく(clinging)、後を追う(following)
 - ・**信号行動** : 泣く(crying)、微笑する(smiling)